も。清く。直く。高く。秀づる。さながら。この山のごとなれば。この山の姿や。即てこの皇國の人のいきうつしと云も。いはんかし。これは。只この皇國にのみの山なれば。日本の山。と名を負せんも。そら言には。あらずなむ。

この文は余が五靈略説といふ文の一節を抜出でたるなりことしの勅題に因みてこゝにろゝぐ

寄山祝

助教授　黒本植

おのれ、ことしの勅題を、よみ奉らん、とおもひけるほとに、ふとかご島にものして、むつきの二日の日、きりしま山のほとりを過ぐ。ことしのけふしも、この名山をみることよ、と神代をかけて、今の大御代をおもひて、村山の梢を隔て、仰ぎみれば、いよ〳〵高く、ます〳〵尊さく、かんと奉りければ、よめる。

神代よりかけすくつれぬ高千穂のたかねなからの君か御代ろな

杉山富槌

仝

雲凌くふしの高峰の姿にそ動かぬ御代の云るしとは見る

下山陸治

仝

とこしへに動かぬ不二の高根こそ我大君の國のミはしら

本田弘

仝

ふたつなき不二の高根の姿こそ我すめくにの姿なるらめ

中内義一

仝

動きなき不二の高根は幾千代もかはらぬ御代のためしなりけり

仝　　石橋愛太郎

榮の戸をれしあけ方の高根こそ豐けき御代の姿なるらん

久方の天のかく山かくはしく榮ゆく國のきこか大御代

仝　　宇野哲人

よろつ世も更にゆるかぬ岩くらの山こそ御代の姿なりけれ

仝　　古賀憲

動きなき富士の高根に君か代の深き惠の雪そつもれる

常盤山松の緑のいろかへぬ君か御代こそ樂しかりけれ

仝　　吉丸一昌

富士の峰の八重棚雲をおし分けてたてるや御代の姿なるらん

仝　　八波則吉

動きなき御代の姿を人問はゝ不二の高根とさゝて答へむ

千代八千代動かぬ御代の礎とはきてそ仰く高千穗の峯

仝　　川村章夫

いや高き御稜威を峰に四方の國凌きて立てる富士の神山

恭賦新年勅題　　杉山富槌

和風送暖自千里。昇平滿目祥雲起。千秋雪白高芙蓉。春光到遍玉容美。晴空突兀姿自雄。

霞抹大麓淑氣冲。萬邦儼乎揭高格。瑞日吐光仰望崇。東海居然爲巨鎭。秀靈無双何處有。人民豐樂帝基隆。草木欣榮君德厚。偉哉威稜如日昇。神州文運勃然興。今朝迎春祝聖壽。嶽色皎潔萬象澂。

知己難　讀人さらず

あさか山淺くそ我はたのみつる底さへ見ゆる人の心を

初雪　松露生

昨日まて寂さかりける吾宿のけさうるはしき雪の花園

稼堂陳人評　昨日とけさと相對しさひしと花ろのと相對す章法井然

さくれせし里の寒さそ知られけるみ山につもるけさの初雪

全評　來を見て往を思ふ時兩るたに寒き里の雪にさちらるゝいかはかり寒からんの意言外にあり

六十の賀を祝ひて　江楠生

今年より千歳の坂をつく杖の數も知られす年やへぬらん

壽賀

つとひ來てことほく人の齡をもかけてそ千代の在數にせん

競漕を見てよめる

江津のうみのなみなみならぬますらをのみるもゆゝしくさはふ友舟

殘雪　蝶夢女史子

今更に消ゆるをしき我宿のみちをへたてし去年の白雪

初　鴉

きゝうしと思ひし野邊のからすさへけさはゆかしき春の初聲

霰　八波則吉

ありかたき御代の惠の厚衾かさねて夜半の霰きくかな

稼堂陳人評　白川樂翁公の歌と共に傳ふべし

遠山雪

肌寒みねやの戸押して眺むれはうへ遠山に雪は降りけり

全評　骨格古に逼る

寒稽古に出つる朝よめる

世の爲めに盡すつとめの稽古なり朝霜かけて身をや鍛はん

全評　猛心楮表に溢る

雪の朝讀める　溪川生

今朝みれは夜半の嵐の龍田山小松かうへに淡雪そ降る

後撰百人一首評釋

禾の舍あるじ

世に後撰百人一首と云ふものを傳ふ其開卷に建武の乱より君臣上下てゝろゝゝろに九重を出で都近き知るべの方へ退き給ひける中に後普光院攝政殿下(良基)は